HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|---|---|
| Title | ウズベキスタンの旧石器時代研究 |
| Author(s) | 長沼, 正樹 |
| Citation | 交替劇 考古資料に基づく旧人・新人の学習行動の実証的研究 A01班2013年度研究報告書, 4, 32-40 |
| Issue Date | 2014-03-31 |
| Doc URL | https://hdl.handle.net/2115/59511 |
| Type | report |
| File Information | Naganuma2014 Uzbekistan.pdf |

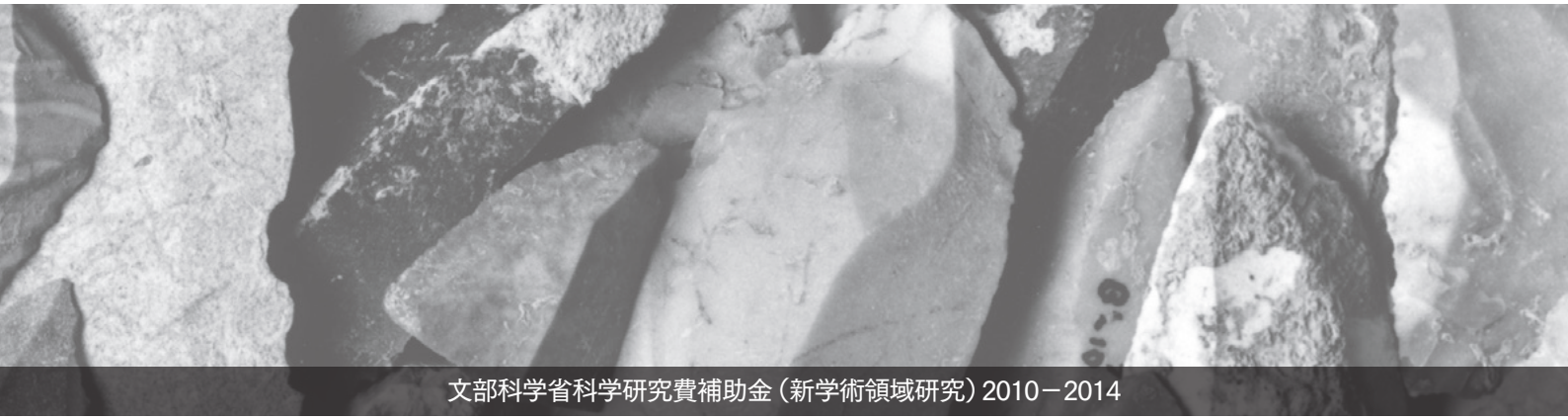
Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

［こうたいげき］

# 交替劇

## 考古資料に基づく旧人・新人の学習行動の実証的研究 4

A01班 | 2013年度 | 研究報告



文部科学省科学研究費補助金（新学術領域研究）2010－2014

西秋良宏 編

【例言】

・本書は、文部科学省科学研究費補助金（新学術領域研究）2010-2014「ネアンデルタールとサピエンス交替劇の真相：学習能力の進化にもとづく実証的研究」（領域番号1201「交替劇」）研究項目A01「考古資料に基づく旧人・新人の学習行動の実証的研究」の2013年度研究報告である。

・研究項目A01の研究目的や方法、計画、発表業績などの最新版については交替劇ホームページhttp://www.koutaigeki.org/を参照されたい。

# 目次 Contents

交替劇
A01班｜2013年度｜研究報告


はじめに …… 西秋良宏 i

研究報告 …… 1

旧人・新人交替劇と両者の学習行動の違いに関わる考古学的研究
—2013年度の取り組み …… 西秋良宏 1

ホモ・サピエンス拡散期の東アフリカにおける石器文化 …… 門脇誠二 8

東シベリアの後期旧石器初頭の様相—交替劇の視点から見たその特徴と系統性 …… 加藤博文 20

ウズベキスタンの旧石器時代研究 …… 長沼正樹 32

朝鮮半島における後期旧石器化と「交替劇」…… 長井謙治 41

ナイフ形石器からみた文化進化—本州中央部の例 …… 仲田大人 48

交替劇関連遺跡・石器製作伝統データベースNeander DBの今後…… 近藤康久 61

投槍器を用いた槍投げとヒトの形態的特徴 …… 日暮泰男 65

石器接合資料から割り手の交替を読み取る
—北海道紋別郡遠軽町旧白滝5遺跡の出土資料を事例に— …… 高倉 純 71

現生狩猟採集民における居住空間構造に関する民族誌調査
—カメルーン南東部地域の事例から …… 石井龍太・中村雄紀・林 耕次 78

国際ワークショップ *Neanderthals and Modern Humans: Archaeological Approaches to Their Learning Behaviors*
に参加して …… 佐野勝宏 85

研究項目A01 2013年度主催・連携研究会等 …… 91

研究業績（2013年度） …… 105

# ウズベキスタンの旧石器時代研究

北海道大学アイヌ・先住民研究センター　長沼正樹

## 1. はじめに

中央アジアのウズベキスタン共和国（O'zbekiston Respublikasi）は、レヴァントと南シベリアとの中間地点に位置し、アフリカから拡散したサピエンスが、ユーラシア大陸を東に向かって横断・進出した際のいわゆる北方ルートに関連している（図1）。筆者は2013年10月に南部のカシュカダリヤ州を中心とする現地踏査に参加する機会を得たことを契機に、A01班データベースの入力作業でこれまで収集してきたロシア語圏の旧石器文献の中から、ウズベキスタンの旧石器研究について学説史と現状の概要を報告する。

## 2. 研究の開始（1930 ～ 50年代）

ウズベキスタンで最初の旧石器時代遺跡を対象とした発掘調査は、1930年代末にテシク＝タシュ（Тешик-таш）洞穴とサマルカンド（Самаркандская）開地遺跡で実施された。前者は旧ソ連の中央アジア諸国でも初めての旧石器時代遺跡を対象とした学術発掘であった。

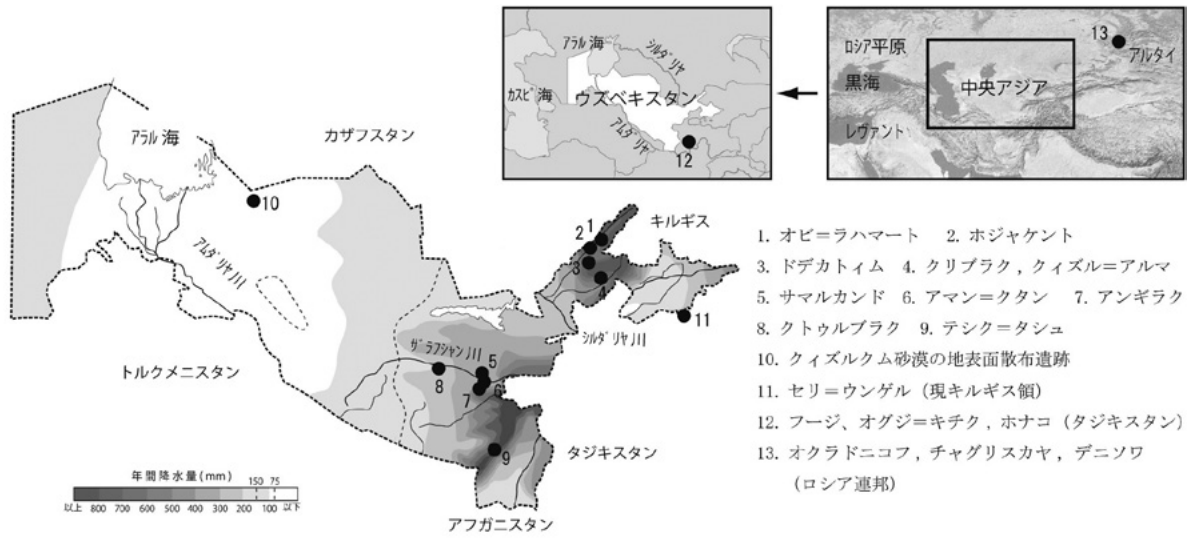
テシク＝タシュ洞穴は1938 ～ 39年の調査で、アイベックスの角に囲まれたネアンデルタール（9歳：男児）の人骨を検出し、角を副葬品とした埋葬行為が解釈された（Окладников 1940; Громова (ред.) 1949）。在地の珪質石灰岩を主体とする2858点の石器群は、塊状や円盤状の石核から打面調整をせずに石刃や縦長剥片、剥片を生産する特徴をもちルヴァロワ生産物は乏しい。二次加工品では凸刃や湾曲刃部のサイドスクレイパー類が卓越する。5枚の文化層間で石器は変化しないという（Окладников 1949）。動物遺存体はアイベックスが83％で、他にシカ類やウマなど78個体が識別された（Громова 1949）。調査者のA.P.オクラドニコフは、出土した石器群の特徴を西アジアのMP（中部旧石器：以下同様）に対比した（Окладников 1949 ibid.）。F.ボルドもフランスのムステリアンとの類似を指摘するなど（Borde 1955）、調査成果は西側の研究者に紹介されて広く認められた（Movius 1953; Davis and Ranov 1999）。近年のmtDNA分析でもネアンデルタールと判別された人骨には（Krause et al. 2007）、細部形態はヨーロッパのネアンデルタールと異なるとの指摘もある（Glantz et al. 2008; Glantz 2010など）。

テシク＝タシュ洞穴の報告後、中央アジア諸国で発見されるルヴァロワ生産物やムステリアンに類似する二次加工品は、「ムスチエ期」の人工遺物として報告されるようになった。ソ連では旧石器時代の伝統的な時期区分は前期旧石器（древний палеолит）と後期旧石器（поздний леолит）の二期であり、中央アジア諸国の「ムスチエ期」はソ連の前期旧石器に帰属し、かつヨーロッパや西アジアのMPに相当する。テシク＝タシュ洞穴に続いてウズベキスタンで調査された「ムスチエ期」遺跡は、アマン＝クタン（Аман-кутан）洞穴である。1947年の発掘で動物遺存体と220点の小規模な石器群とネアンデルタール人骨を検出したとの文献もあるが（Лев 1949）、旧ソ連の旧石器時代人骨を網羅した近年の集成（Герасимова и др. 2007）には採録されず、詳細は不明である。

一方のサマルカンド遺跡は1939年から1970年代まで計1000㎡以上を発掘し、都合4枚前後の文化層を検出したという（Коробкова и Джуракулов 2000）。石器群は小石刃、小石刃を素材としたトゥール類と、礫器や円盤石核など「古風」な石器をともに含むことから、ヨーロッパ的なUP（上部旧石器：以下同様）の認識とは一致しない点が特に注目された。ウマ、オーロックス、ラクダなど3000点以上の動物遺存体の中にはサピエンスの下顎骨があるというが、出土状況の詳細は不明である（Герасимова и др. 2007: 170-172）。

サマルカンド遺跡に続くUP遺跡の発見は、後述するクリブラク（Кульбулак）開地遺跡の上層（K

**図1** **言及する遺跡の位置**
（年間降水量地図は *Атлас Узбекской ССР* 初版1982 p.67をトレース）




асымов 1972）などわずかな例を除くと、旧ソ連中央アジア諸国の全体でも少ない状態が長く続いた。その中でサマルカンド遺跡の石器群はUPの代表例として、全容は不明なまま一部の要素が取り上げられて広域比較が論じられた。礫器を伴う点でマリタ遺跡などシベリアとの関係や（Абрамова 1984bなど）、カリネーテット石核（掻器）や背付き小石刃を伴う点で、西アジアやヨーロッパのオーリナシアンとの関係（Otte and Kozlowski 2003など）等である。年代測定は実施されないままに、約4万年前のEUP（Early Upper Paleolithic）とする説、2万年前以後のMUP（Middle Upper Paleolithic）とする説、中石器時代（Mesolithic）と見る説が並立し、決め手に欠けている（Коробкова и Джуракулов 2000 ibid.）。埋没後擾乱や古い発掘手法による異なる時期の石器の混在、細石器など指標的な小形遺物を回収できていないとも指摘されている（Vishnyatsky 1999; Kolobova et al. 2012）。

## 3.「ムスチエ期」の類型化（1960～80年代）

1960 ～ 80年代には旧石器遺跡の確認数が増え、それらを石器群の特徴にもとづいて類型化する研究が生じた。ウズベキスタンでは1971年の時点で34ヶ所の「ムスチエ期」遺跡が記されている（Ранов 1971）。当時はまだUPやLP（下部旧石器：以下同様）の調査事例は少なかったので、類型化研究の対象は「ムスチエ期」の諸遺跡であった。V.A.ラーノフは、ソ連中央アジア諸国に所在する「ムスチエ期」遺跡を、以下4つの「様相あるいは技術的変異」に区分した（Ranov and Davis 1979など）。

①ルヴァロワ（леваллуа）。単設打面や両設打面のルヴァロワ石核が普通に認められ、ルヴァロワポイントや、整った石刃を広く伴うグループ。二次加工品は少ないが単刃スクレイパーが卓越する。②ルヴァロワ・ムスチエ（леваллуа мустье）。上記の①と類似するが、周縁加工の石刃が多いグループ。③山岳ムスチエまたは典型的ムスチエ（мустье горное или тепичное）。二次加工品にヨーロッパのムステリアンとの共通性が高い各種スクレイパー類を多く含むグループ。④ソアン伝統ムスチエ（мустье-соан）。礫器の存在を特徴とするグループ。ルヴァロワ生産物は低調ながら、精巧なムステリアンポイントやムステリアン的なスクレイパー類を含む。パキスタン北部の礫器インダストリー「ソアン文化」との系統関係を念頭に置いて設定された。

以上の中でウズベキスタンの遺跡は、①のグループとしてホジャケント（Ходжикент）洞穴とオビ＝ラハマート（Оби-рахмат）洞穴、③のグループとしてテシク＝タシュ洞穴とクトゥルブラク（Кутурбулак）開地遺跡が挙げられた。ホジャケント洞穴は1958年の発掘で524点の石器群が報告され、ルヴァロワ生産物に加えて小口面石核や扁平石核による石刃生産が注目された（Окладников 1961）。ラーノフは彼の類型で①のグループとしたが、石刃が目立つことからUPに近い「ムスチエ期後期」とも考えていた（Ранов 1971）。

オビ＝ラハマート洞穴は1964 ～ 86年の調査で、

厚さ約10mの堆積物から無遺物層を介在させずに30,000点以上の石器群を検出した。ソ連時代の主要調査者であるR.Kh.スレイマーノフは、ルヴァロワ生産物と石刃や石刃素材のUP的石器の多さを重視して「ムスチエ期からUPに向かう地域文化の具体的な様態」である「オビ＝ラハマート文化」を提唱した（Сулейманов 1972）。また全層の石器群が本質的には同じ（Абрамова 1984 a ）、全層の石器群が単一のMP文化（Vishnyatsky 1999）など、レニングラード（現：サンクトペテルブルク）の研究者によるコメントもある（後年の再調査については後述する）。

クトゥルブラク遺跡は1971 ～ 72年と95年に発掘された開地遺跡である。厚さ約2.5mの堆積物中に複数文化層の存在が指摘されたが（Ташкенбаев и Сулейманов 1980）、後に再堆積と判明した（Сулейманов 2005）。8000点以上の石器群は、規格性の乏しい石英の一群と細粒石材の一群で技術的特徴が異なるという。細粒石材にはルヴァロワ石核や平行剥離面をもつ両設打面・単設打面の石核を含む600点以上の石核がある。細粒石材には二次加工品も多く、特徴的な石器はルヴァロワ生産物、MP的なスクレイパー類、抉入石器、リマース等である（Ташкенбаев и Сулейманов 1980 ibid.）。

先述したクリブラク遺跡ではラーノフの4類型とは異なるMP石器群が注目された。ソ連時代の1962 ～ 84年の発掘区は最深部で地表下19m、発掘面積は計600㎡以上、回収した石器資料は70,000点以上という。初期の報告では上部層群がUP、中部の複数層は「ムスチエ期」、最下層がLPの「後期アシューリアン」と報告された（Касымов 1972）。この中部層「ムスチエ期」は、コーカサス山地やロシア平原などソ連各地で報告されていた「デンティキュレイト・ムステリアン（3 убчатое мустье）」の、中央アジアで最初の検出例とされた。しかしMP包蔵層の堆積物の形成過程には異論があり、後年に再発掘が実施されている（後述）。

1980年刊行の『ザラフシャン川流域の旧石器時代文化』（Ташкенбаев и Сулейманов 1980）は、中央アジア全域の体系化を目指したラーノフとは対照的な地域研究である。先述のアマンクタン洞穴とクトゥルブラク遺跡に小規模な試掘調査の事例をいくつか加えて「ムスチエ期」の二つの文化類型を提示した。それらは①アマンクタン洞穴など上記の諸遺跡に「オビ＝ラハマート文化」を加えた「ルヴァロワを多用する」類型と、②クリブラク遺跡の「円盤石核と鋸歯縁石器の文化」である。また1984年刊行の『ソヴィエト社会主義共和国連邦の旧石器』では、「ムスチエ期」は前期旧石器時代の一部として扱われ、Z.A.アブラモワが「ソ連アジア地区における前期旧石器時代」の章で、「中央アジアとカザフスタン」、「シベリアと極東」の44ヶ所の遺跡を収録・解説した（Абрамова 1984 a ）。ウズベキスタンの遺跡ではオビ＝ラハマート洞穴が約5万年前、一方でホジャケント洞穴、テシク＝タシュ洞穴、クリブラク遺跡中部層、クトゥルブラク遺跡は約8万年前（リス＝ヴュルム間氷期）に位置づけられた。年代の根拠は数値年代ではなく、遺跡が立地する地形や古土壌、動物遺存体の構成、石器の技術形態学的・型式論的な比較などからの判断であった。後にL.B.ヴィシニャツキーは、ラーノフやスレイマーノフの文化類型の設定を疑問視し、中央アジアには「通常ムスチエ」（мустье обычное）というべき単一のMP文化があるのみで、石器群間の変異は、石材環境や場の機能差の反映であると論じた（Вишняцкий 1996; Vishnyatsky 1999）。年代測定が実施された事例も少なく、類型化されたグループ間の新旧関係（時期差）も不明であった。

こうした中で中央アジアのMPの実年代は、タジキスタン南部に所在するレス露頭遺跡で探索された。そこでは古地磁気やTLで約800 ～ 70kaの古土壌中からモードIの剥片石器群を検出して、「ムスチエ期」に先行するLP（カラタウ文化：600 ～ 70kaなど）の研究も本格化した（Ranov 1995; Davis and Ranov 1999; Pospelova et al. 2005など）。調査に危険を伴うレス露頭では面的な発掘に制約があったが、MPを示唆する調整石核はMIS-11の古土壌から出現し、明確なルヴァロワ生産物や石刃は約40kaの古土壌とその直下で増加するという（Ranov and Schäfer 2000）。タジキスタンではレス露頭ではない通常の開地遺跡や洞穴遺跡でも、ルヴァロワ生産物を含む石器群の出土層についてC14年代測定が実施され、フージ（Худжи）開地遺跡の下層で43cal.ka、オグジ＝キチク（Огзи-кичик）洞穴で＞30ka、＞38kaなどがある（Ранов и Каримова 2005）。これらが中央アジアのMPあるいはルヴァロワ関連石器群（EUPを含む）の年代を検討する上で、参照可能な例となっている。

なおLPとして報告されたセリ＝ウングル（Сель-унгур）洞穴（現：キルギス共和国領）は、Uシリーズ年代で126 ～ 65kaのトラバーチン堆積物よりも下層で石器群と動物骨を検出した。小形動物の組成から中期更新世と判断され、500点以上が回収された石器群は当初は「アシューリアン」と報告されたが、実際には抉入石器などを含む剥片石器群である（Вишняцкий 1996; Davis and Ranov 1999など）。エレクトスとネア

ンデルタールとの中間的な人類の歯が出土したものの（Герасимова и др. 2007: 175-178）、人類ではないとの見解もある（Glants et al. 2008: 224）。他にLP関連の事例では、西部のクィズルクム砂漠で土壌のない地表面散布タイプの遺跡から、ハンドアックスやルヴァロワ生産物に関連する採集資料が報告されている（Вишняцкий 1996; Sayfullaev et Cauche 2004など）。

## 4. 再調査とUPの確認（1990年代～現在）

ソ連の崩壊後は英語による刊行物が増え、非・共産圏の研究者でも情報入手や研究内容の理解が容易となった。堆積物が厚く遺物の豊富なオビ＝ラハマート洞穴とクリブラク遺跡は古環境や石器群の変遷を長期間にわたって層位的に把握できる点が重視され、ウズベキスタン共和国の独立後も、ロシア科学アカデミーシベリア支部ノヴォシビルスク考古学・民族学研究所と、ウズベク隊との合同体制によって組織的な再調査が継続された。

オビ＝ラハマート洞穴は1998年～ 2003年の再調査で、ESR、Uシリーズ、C14、AMSの各種年代測定と花粉分析の結果、堆積物の大部分がMIS-3で最下部はMIS-5eと判明した（Деревянко (ред.) 2004）。ルヴァロワポイントを伴う石刃石器群の中に、細石刃核や掻器などUP的石器を含む状態が下層から上層まで連続し、上層ほど小形の石刃とUP的石器が増加するという。時期区分や分層には複数の文献があり、A.P.デレヴィヤンコの2010年の見解では、自然層6 ～ 2がLUP（Late Upper Paleolithic）、自然層14 ～ 7が50 ～ 30kaのEUP、自然層21 ～ 15が90 ～ 50kaのMPおよびMP-UP移行期とされた（Derevianko 2010b）。2003年に出土した16層の人類化石（頭蓋骨片、歯、中耳骨）はネアンデルタールあるいはサピエンスの一方に特定できず、両者の混血、未知の地域変異種などの可能性も指摘されている（Glantz et al. 2008）。

こうしてオビ＝ラハマート洞穴は90 ～ 30kaにかけて石器群が連続的に推移した事例を提供し、また南シベリア（アルタイ山地）やモンゴルでもMPが連続的にUP化することが確認されていた（Derevianko and Shunkov 2005; 2009; Деревянко и др. 2010など）。この石器群（文化）変遷の連続性は、「在地の先住人類が各地で広義のホモ・サピエンスへと進化した」との仮説をデレヴィヤンコが主張する上で、中核的な根拠として引用された（Derevianko 2010a; 2010b; 2011; Derevianko and Shunkov 2012; 加藤2012、デレヴィアンコ2012など）。

クリブラク遺跡の再調査は1990年と2007 ～ 11年に実施された。後者はノヴォシビルスク隊にベルギー隊を加えた3ヶ国合同体制である。上層のUP石器群はプリズム状石核や小口面石核からの小石刃生産、カリネーテッド石核による細石刃生産、小石刃を素材とした掻器等を特徴とし、2009年にはサピエンスの特徴をもつ歯が出土した（Kolobova et al. 2013: 20）。このUP石器群について、先述したサマルカンド遺跡の一部や後述するドデカティム-2（Додекатым）遺跡、隣接諸国のタジキスタン、カザフスタン、アフガニスタンに所在する関連遺跡と共に、ザグロス山地のバラドスティアンに類似するUP石器伝統としてクリブラキアンが提唱された（Ranov et al. 2012; Kolobova et al. 2013 ibid.）。複数遺跡の14C年代から、クリブラキアンの継続期間は約30 ～ 20kaと想定されている（Kolobova et al. 2013 ibid.）。

過去に「デンティキュレイト・ムステリアン」とされた中部層のMP石器群は、複数時期の混在や再堆積過程における非人為の割れが確認され、中央アジアのMP文化類型「デンティキュレイト・ムステリアン」の標識資料としての意義は却下された（Kolobova et al. 2012）。さらに地表下約14m（23層）の石器群は、石刃と小石刃が発達していることから旧所見のLPではなく、オビ＝ラハマート洞穴の石器群と類似するMPと判断された。地表下6mまでの深度の堆積物はルミネッセンス年代で82 ～ 39kaの範囲という（Vandenberghe et al. 2013）。

ウズベキスタンや中央アジア諸国では長い間、UP遺跡の事例が少なく、LGMの寒冷化による人口減少、完新世初頭の沖積作用による遺跡の削剥・破壊などと説明されてきたが（Davis and Ranov 1999）、2000年代以後に、複数のUP遺跡が相次いで確認されるようになった。

アンギラク（Ангилак）洞穴はアメリカ隊との共同調査による2002 ～ 04年の発掘で、石英など485点の石器群と、種不明人類の中足骨を含む2200点以上の動物遺存体を検出した。AMS年代は約48 ～ 31cal.kaである（Beeton et al. 2013）。ヨーロッパ等のUPと同年代のルヴァロワ関連石器群と指摘されるが（Glantz et al. 2004; Glants 2010）、調査者の一人スレイマーノフはMPの「オビ＝ラハマート文化」に帰属すると判断している（Сулейманов 2005）。

ドデカトィム-2開地遺跡は2005 ～ 10年にノヴォシビルスク隊との共同調査で、厚さ約4mの堆積物中から5枚の文化層を識別した（Kolobova et al. 2011）。約

6700点の石器群の特徴は先述のクリブラク遺跡UP文化層と共通する。下層ではカリネーテッド石核と湾曲した細石刃が多く、上層でプリズム状石核と直線的な小石刃が増えるという。文化層4のAMS年代は29 ～ 26 cal. kaである。クィズル＝アルマ-2（Кызыл-Алма）開地遺跡はノヴォシビルスク隊との合同で2008年に発掘された、石材産地に近接する製作跡である。堆積物中の石器の垂直分布幅が広く、石器表面の強い風化から、斜面プロセスによる埋没過程の擾乱が指摘されている（Колобова и др. 2010）。4000点以上の石器群の中にルヴァロワを含む扁平石核から石刃を生産する例、小口面石核やカリネーテッド石核から小石刃を剥離する例、小石刃に二次加工を加えたトゥール等を含む。報告者は当初、オビ＝ラハマート洞穴の石器群と類似するEUPと指摘していたが（Колобова и др. ibid.）、後年の論文ではクリブラキアンとされている（Kolobova et al. 2013）

## 5. 考察

ウズベキスタンには確実な層位・狭い数値年代幅・弁別的な石器群の特徴の3点を備えたMPの報告例は皆無と言える。南シベリアやモンゴルと同様にルヴァロワ生産物を含む石器群が遅くまで続いた可能性や、ヨーロッパではMPに相当する年代に、セリ＝ウンゲル洞穴およびカザフスタンの小石器インダストリー（Деревянко и др. 2000など）といったオルドワン的なモードI石器群（剥片インダストリー）が展開していた可能性もあり、MPを定義する基準の確立が課題となっている。

UPでは、プリズム状石核やカリネーテッド石核から小石刃・細石刃を生産する約30 ～ 20kaのクリブラキアンが設定された。しかし交替劇で焦点となるMPとクリブラキアン、またはUPとの間や移行期に相当する石器群は、オビ＝ラハマート洞穴の中部層や上部層が該当するのであろうが、他の遺跡で上下の文化層から独立して特定の特徴を示す石器群を数値年代とともに把握できた事例はなく、実体は不明といってよい。

このような資料的限界はあるが、交替劇の観点から考察してみたい。ネアンデルタール人骨の出土例は中央アジアではテシク＝タシュ洞穴の一例のみで、南シベリア・アルタイ山地にはオクラドニコフ（Окладников）洞穴およびチャグリスカヤ（Чагырская）洞穴（Mednikova 2013）、デニソワ(Денисова)洞穴（Mednikova 2011, Prüfer et al. 2014)があり、C14年代で50～40 cal.kaである。オクラドニコフ洞穴とチャグリスカヤ洞穴の石器群は「シビリャチーハ・インダストリー」と命名され、UP的石器が少ないなどアルタイ山地に所在する他のMP遺跡石器群とは異なることが主張されている（Derevianko 2010b ; Derevianko et al.2013など）。ウズベキスタンの遺跡に比較すると、オビ＝ラハマート洞穴の石器群よりもテシク＝タシュ洞穴の石器群に近いという(Derevianko 2010b, Ibid.)。

仮にオビ＝ラハマート洞穴の石器群の担い手がネアンデルタールでないならば、MIS-5eからMIS-3の活動痕跡を当該洞穴に残した人類は誰だったのか？先述のデレヴィヤンコは「在地の先住人類が各地で広義のホモ・サピエンスへと進化した」と論じる脈絡で、西アジアのMPのタブンD型が中央アジアにも分布していたと想定している。オビ＝ラハマート洞穴の最下層や、タジキスタンのホナコ（Хонако）-3遺跡古土壌2（MIS-7 ～ 6）の上位の石刃石器群（いずれも100 ～ 90kaとデレヴィヤンコが評価）が、タブンD型の存在を示唆するのだという（Derevianko 2010b: 28）。担い手人類は不明だが、彼らがやがてEUPと呼ばれる年代に西アジアと一見すると良く似た石器群を、西アジアからの集団移住や人類の交替といった出来事は無くても、在地的に発現させ得たという説明である（Derevianko 2010b ibid; Krivoshapkin et al. 2006）。この在地集団がもしもサピエンスであれば、すでに100 ～ 90kaやその前から中央アジアにサピエンスがいて、彼らは当初はMPを作り、やがて独自に石器群をUP化させたというシナリオとなる。タブンD型に人骨が共伴する事例のない現時点では、いちがいに否定できない（強く肯定する証拠もないが）。

さらに、デニソワ人がユーラシア東部に広く分布していた可能性（Alves et al. 2012; Stringer 2012; 海部2013など）も無視できない。アルタイ山地のデニソワ洞穴では、デニソワ人骨が出土した層にペンダントやビーズ、簡素な骨器など現代人的行動を示唆する人工品がありC14年代は50 ～ 30ka（未較正）と幅広いが、最古値を採用するとヨーロッパよりも古い現代人的行動となる（Derevianko 2010a ibid.）。現時点では一遺跡のみの事例で、人骨も断片的なのでこの共伴関係はまだ確実視できないが、仮に人骨と現代人的行動の共伴を認めるならば、デニソワ人はサピエンスではないのに現代人的行動を発現したことになる。デニソワ人や関連する（混血等の）集団が、北や東から中央アジアに侵入した可能性もやはり現時点では排除できない（やはり強く肯定する証拠もない）。今後、遺伝学や人類学の研究が進むにつれて、デレヴィヤンコの説が検証されてゆくに違いない。

一方でデレヴィヤンコ説から離れると、オビ＝ラハマート洞穴の石器群や南シベリアとモンゴルのMP-UP移行期、EUPをルヴァロワ＋石刃という共通性で（Свобода 2001など）、西アジアのエミランや東欧のボフニチアンと関連づけて、サピエンスのヨーロッパ侵入と同期する50 ～ 40cal.kaの広域拡散の一環と見ることもできる。在地文化と新来文化との「連続性」については、先住民の石器と新来サピエンスの石器、それぞれの特徴（ルヴァロワなど）が互いに似ていたので連続して見える等の形で説明することになる（西秋2013：p201）。

ウズベキスタンを中心とする中央アジアで交替劇に前後する時代に生じた出来事を、単純化して時系列で整理すると以下となる。

① かつて西アジアMPのタブンD型が、中央アジアにも広がっていた（約100ka以前）。担い手は不明。
② ネアンデルタールが中央アジアに現れた。彼らの石器伝統は、確認されている例ではテシク＝タシュ洞穴の石器群と、南シベリアのシビリャチーハ石器伝統である（利用可能な年代は50 ～ 40cal.ka）。
③ やがてプリズム状石核やカリネーテッド石核、細石刃を特徴とするUPのクリブラキアンが中央アジアに現れた（約30ka）。担い手はおそらくサピエンス。

この③に先立って、ヨーロッパ進出とほぼ同期して（50 ～ 40cal.ka）サピエンスの広域拡散が、中央アジアや南シベリアにも及んだと考えるのか、こうした拡散を否定するのかが争点であり、議論の一致を見ていない。しかしこの時点でのサピエンス拡散を仮に認めても、その時の中央アジアや南シベリアの先住民は、かつてのタブンD型の末裔（もしかしてサピエンス）、デニソワ人、ネアンデルタール、以上のいずれであったのか現時点では絞り込めない。先住民もサピエンスであれば頻繁な文化的交流や混血、同化もあり得ようし、交替とは言えないことにもなろう。多くの議論が将来の調査に開かれている。 逆に、担い手の人類が交替しても（したはずでも）石器伝統はあまり変化しないことは、中国（加藤2013）や東南アジアにも該当するように見える。多地域進化説の証拠に直結させるのが先述のデレヴィヤンコの説であるが、むしろ人類の種が入れ替わっても文化は連続した、あるいは大きくは変わらなかったとの視点も重要である（小林2013）。そうした事象の事実確認や説明が進むことで、サピエンスの広域拡散とそれに対面した先住民との関係をめぐる理解が深まると考える。

［引用文献］


Абрамова, З. А. 1984a Ранний палеолитАзиатской части СССР. В кн.*Палеолит СССР*, П. И. Борисковский (ред.), с.135-160. Москва, Издательство Наука.

Абрамова, З. А. 1984b Поздний палеолитАзиатской части СССР. В кн. в кн.*Палеолит СССР*, П. Т. Борисковский (ред.), с.302-346. Москва, Издательство Наука.

Alves, I., Hanulová, A. Š., Matthieu, F. and L. Excoffier 2012 Genomic date reveal a complex making of humans. *Plos Genetics* 8(7):1-7.

Beeton, T. A., Glantz, M. M., Trainer, A. K., Temirbekov, S. S. and R. M. Reich 2013 The fundamental hominin niche in late Pleistocene Central Asia: a preliminary refugium model. *Journal of Biogeography* 40(8):1-16.

Bordes, F. 1955 Review of Movius, H. L., 1953. *L'anthropologie* 59:118-123.

Davis, R. S. and V. A. Ranov 1999 Recent work on the Paleolithic of Central Asia. *Evolutionary Anthropology* 8(5):186-193.

Derevianko, A. P. 2010a Three scenarios of the Middle to Upper Paleolithic transition scenario 1: the Middle to Upper Paleolithic transition in Northern Asia. *Archaeology, Ethnology & Anthropology of Eurasia* 38(3):2-32.

Derevianko, A. P. 2010b Three scenarios of the Middle to Upper Paleolithic transition scenario 1: the Middle to Upper Paleolithic transition in Central Asia and the Near East. *Archaeology, Ethnology & Anthropology of Eurasia* 38(4):2-38.

Derevianko, A. P. 2011 The origin of anatomically modern humans and their behavior in Africa and Eurasia. *Archaeology, Ethnology & Anthropology of Eurasia* 39(3):2-31.

デレヴィアンコA.P.（佐藤宏之解説）2012「人類の起源とユーラシア大陸における人類の居住－解剖学的現生人類の形成－」『旧石器研究』8:1-20.

Деревянко, А. П. (ред.) 2004 *Грот Оби Рахмат*, Новосибирск, Издательстово института археологии и этонографии Российская академия наук Сибирское отделение.（＝以後 Изд-во ИАЭ С О РАН と略記）

Деревянко, А. П., Кандыба, А. В., Петрин, В. Т. 2010 *Палеолит Орхона*, Новосибирск, Изд-во ИАЭ СО

РАН.

Derevianko, A. P., Markin, S. V. and M.V.Shunkov 2013 The Sibiryachikha facies of the Middle Paleolithic of the Altai. *Archaeology, Ethnology & Anthropology of Eurasia* 41(1):89-103.

Деревянко, А. П., Петрин, В. Т., Таймагамбетов, Ж. К., Исабеков, З. К., Рыбалко, А. Г., Отт, М. 2000 *Раннепалеолитические микроиндустриальные комплексы в травертинах Южного Казахстана*, Новосибирск, Изд-во ИАЭ СО РАН.

Derevianko, A. P., and M. V. Shunkov 2005 Formation of the Upper Paleolithic transitions in the Altai. In *Discussion: The Middle to Upper Paleolithic Transition in Eurasia Hypothesis and Facts. Archaeology, Ethnology and Anthropology of Eurasia*, edited by A.P. Derevianko, pp.283-311. Новосибирск, Изд-во ИАЭ СО РАН.

Derevianko, A. P., and M. V. Shunkov 2009 Development of early human culture in Northern Asia. *Paleontological Journal* 43(8):881-889.

Derevianko, A. P., and M. V. Shunkov 2012 A new model of formation of the anatomically modern human. *Herald of the Russian Academy of Sciences* 82(2):79-89.

Герасимова, М. М., Астахов, С. Н., Величко, А. А. 2007 *Палеолитический человек, его материальная культура и природная среда обитания (Иллюстрированный каталог палеоантропологических находок в России и на смежных территориях)*, Санкт-Петербрг, Нестор-История.

Glantz, M. 2010 The history of hominin occupation of Central Asia in review. In *Asian Paleoanthropology: from Africa to China and Beyond*, edited by C.J. Norton and D.R.Braun, pp.101-112. Springer.

Glantz, M., Viola, B. and T. Chikisheva 2004 New hominid remains from Obi-Rakhmat grotto. В кн. *Грот Оби Рахмат*, А.П.Деревянко (ред.), с.93-99. Новосибирск, Изд-во ИАЭ СО РАН.

Glantz, M., Viola, B., Wrinn, P., Chikisheva, T., Derevianko, A., Krivoshapkin, A., Islamov, U., Suleimanov, R. and T. Ritzman 2008 New hominin remains from Uzbekistan. *Journal of Human Evolution* 55:223-237.

Громова, В. И.1949 Плейстоценовая фауна млекопитающих из гротаТешик-таш,южный Узбекистан. В кн.*Тешик-таш палеолитический человек*, В. И. Громова (ред.), с.88-108. Москва, Издательстово Московского государственного университета.

Громова, В. И. (ред.) 1949 *Тешик-таш палеолитический человек*, Москва, Издательстово Московского государственного университета.

Касымов, М. Р. 1972 Многослойная палеолитическая стоянка Кульбулак в Узбекистане (предварительные итоги исследлваний). *Палеолит и неолит СССР 7: материалы и исследования института археологии* № 185: 111-119.

海部陽介2013「ホモ・サピエンスのユーラシア拡散－デ最近の研究動向－」西秋良宏（編）『ホモ・サピエンスと旧人－旧石器考古学からみた交替劇－』:3-17. 六一書房.

加藤博文2012「シベリアにおける中期旧石器の系統をめぐって－デレヴャンコ説の検討－」西秋良宏（編）『交替劇』No.2:25-31. A-01班研究報告書.

加藤真二2013「考古学からみた中国における旧人・新人交替劇」西秋良宏（編）『ホモ・サピエンスと旧人－旧石器考古学からみた交替劇－』:129-142. 六一書房.

小林　豊2013「種交替前後における考古文化の連続性という現象をいかに解釈すべきか?」『第67回日本人類学会大会プログラム・抄録集』:83.国立科学博物館人類研究部.

Kolobova, K. A., Flas, D., Derevianko, A. P., Pavlenok, K. K., Islamov, U. I. and A. I. Krivoshapkin 2013 The Kulbulak bladelet tradition in the Upper Paleolithic of Central Asia. *Archaeology, Ethnology & Anthropology of Eurasia* 41(2):2-25.

Kolobova, K. A., Krivoshapkin, A. I., Derevianko, A. P. and U. I. Islamov 2011 The Upper Paleolithic site of Dodekatym-2 in Uzbekistan. *Archaeology, Ethnology & Anthropology of Eurasia* 39(4):2-21.

Kolobova, K. A., Krivoshapkin, A. I., Pavlenok, K. K., Flas, D., Derevianko, A. P. and U. I. Islamov 2012 The Denticulate Mousterian as a supposedly distinct facies in Western Central Asia. *Archaeology, Ethnology & Anthropology of Eurasia* 40(1):11-23.

Колобова, К. А., Павленок, К. К., Фляс, Д., Кривошапкин, А. И. 2010 Стоянка Кызыл-Алма-2-новый памятник эпохи верхнего палеолита западного Тянь-Шаия. *Vestnik NGU (Quatenary Journal of Novosibirsk State University)* 9(5): 111-123.

Коробкова, Г. Ф., Джуракулов, М. Д. 2000 Самаркандская стоянка как эталон верхного палеолита

Средней Азии (специфика техники расщепления и хозяйстовенно-производственной деятельность). *Stratum plus*, No.1:385-462.

Krause, J., Orlando, L., Serre, D., Viola,B., Prüfer, K., Richards, M. P., Hublin, J. J., Hänni, C., Derevianko A. P. and S. Pääbo 2007 Neanderthals in central Asia and Siberia. *Nature* 449(18):902-904.

Krivoshapkin, A. A., Anoikin, A. A. and P. J. Brantingham 2006 The lithic industry of Obi-Rakhmat Grotto, Uzbekistan. *Indo-Pacific Prehistory Association Bulletin* 26:5-19.

Лев, Д. Н. 1949 Новая находка дрнвнего палеолита в пещере Аман-кутан близ города Самарканда. *Природа* 6:66-70.

Mednikova, M.B. 2011 A proximal pedal phalanx of a Paleolithic hominin from Denisova cave, Altai. *Archaeology, Ethnology & Anthropology of Eurasia* 39(1): 129-138.

Mednikova, M. B. 2013 An archaic human ulna from Chagyrskaya cave, Altai: morphology and taxonomy. *Archaeology, Ethnology & Anthropology of Eurasia* 41(1):66-77.

Movius, H. L. 1953 Palaeolithic and Mezolothic sites in soviet Central Asia. *Proceedings of the American Philosophical Society* 97(4)383-421.

西秋良弘2013「交替劇の時期と過程をめぐる諸問題－あとがきにかえて－」西秋良宏（編）『ホモ・サピエンスと旧人－旧石器考古学からみた交替劇－』:197-203. 六一書房.

Окладников, А. П. 1940 Неандертальский человек и следы его культуры в среднией Азии (редварительные данные и выводы о раскопках в гроте Тешик-Таш) *Советская Археолокия* 6:5-19.

Окладников, А. П. 1949 Исследование мустьерской стоянки и погребения неандертальца в гроте Тешик-таш, южный Узбекистан (Средная Азия). В кн.*Тешик-таш палеолитический человек*, В. И. Громова (ред.), с.7-85. Москва, Издательстово Московского государственного университета.

Окладников, А. П. 1961 Ходжикентская пещера-новы мустьерский памятник Узбекистана. *Краткие сообщения Института археологии*. вып.82:68-76.

Otte, M. and J. K. Kozloeski 2003 Constitution of the Aurignacian through Eurasia. In *The Chronology of the Aurignacian and of the Transitional Technocomplexes. -Dating, Stratigraphies, Cultural Implications- Proceedings of Symposium 6.1 of the XIV th Congress of the UISPP (University of Liege, Belgium, September 2-8, 2001)*, edited by J. Zilhão and F. d' Errico, pp.19-27. Liege.

Pospelova, G. A., Laukhin, S. A., Ranov, V. A., Vlasov, V. K., Volgina, V. A., Kulikov, O. A., Pilipenko, O. V., and Z. V. Sharonova 2005 New data on the chronostratigraphy on the upper stratum of the regional buried soil from the loess profile at Khonako-3, Tadzhikistan (archaeological, paleomagnetic and magnetic evidence). *Archaeology, Ethnology & Anthropology of Eurasia* 21(1):21-39.

Prüfer, K., Fernando Racimo, F., Patterson, N., Jay, F., Sankararaman, S., Sawyer, S., Heinze, A., Renaud, G., Sudmant, P.H., de Filippo, C., Li, H., Mallick, S., Dannemann, M., Fu, Q., Kircher, M., Kuhlwilm, M., Lachmann, M., Meyer, M., Ongyerth, M., Siebauer, M., Theunert, C., Tandon, A., Moorjani, P., Pickrell, J., Mullikin, J. C., Vohr, S. H., Green, R. E., Hellmann, I., Johnson, P. L. F., Blanche, H., Cann, H., Kitzman, J. O., Shendure, J., Eichler, E. E., Lein, E. S., Bakken, T. E., Golovanova, L. V., Doronichev, V. B., Shunkov, M. V., Derevianko, A. P., Viola, B., Slatkin, M., Reich, D., Janet Kelso, J. and S. Pääbo 2014 The complete genome sequence of a Neanderthal from the Altai Mountains. *Nature* 505:43-49.

Ранов, В. А.1971 К изучению мустьерской кулыгуры в средней Азии. *Палеолит и неолит СССР 6, Материалы и исследования института археологии.* № 173: 209-232.

Ranov, V. A. 1995 The'Loessic Palaeolithic'in South Tadhikistan, central Asia: its industries, chronology and correlation. *Quaternary Science reviews* 14:731-745.

Ranov, V. A. and R. S. Davis 1979 Toward a new outline of the Soviet Central Asian Paleolithic. *Current Anthropology* 20 (2):249-270.

Ранов, В. А., Каримова, Г. Р. 2005 *Каменный век Афгано-Таджикской депрессии*. Душанбе, Деваштич.

Ranov, V. A., Kolobova, K. A. and A. I. Krivoshapkin 2012 The Upper Paleolithic assemblages of Shugnou, Tajikistan. *Archaeology, Ethnology & Anthropology of Eurasia* 40(2):2-24.

Ranov, V. A. and J. Schäfer 2000 The Palaeolithic of

the Late Middle Pleistocene in Central Asia, 400-100 ka ago. In *Toward Modern Humans:Yabrudian and Micoquian,400-50 k-years ago, BAR International Series 850,* edited by R. Avraham and M. Weinstein-Evron, pp.77-94.Oxford, Archaeopress.

Sayfullaev, B. et Cauche, D. 2004 Nouvelles découvertes paléolithiques dans la partie nord-est du Kizilkum Central (Ouzbékistan). *L'anthropologie* 108:55-67.

Stringer, C. 2012 The status of Homo heidelbergensis (Schoetensack 1908). *Evolutionary Anthropology* 21:101-107.

Сулейманов, Р. Х. 1972 *Статистическое изучение культуры грота Оби-Рахмат*, Ташкент, Издательство «Фан» Узбекской ССР.

Сулейманов, Р. Х. 2005 *Отчет о раскопках грота Ангиллак в 2004*, Ташкент, Институт истории академия наука Республика Узбекистана.

Свобода, И. 2001 О перехода от среднего к верхнему палеолиту в северной Евразии. *Археология, этнография и антропология Евразии* 4(8):30-37.

Ташкенбаев, Н. Х., Сулейманов, Р. Х. 1980 *Культура древнекаменного века долины Зарафщана*. Ташкент, Издательстово «Фан» Узбекской ССР.

Vandenberghe, D. A. G., Flas, D., De Dapper, M., Van Nieuland, J., Kolobova, K., Pavlenok, K., Islamov, U., De Pelsmaeker, E., Debeer, A.-E. and J.-P. Buylaert 2013 Revisiting the Palaeolithic site of Kulbulak (Uzbekistan): first results from luminescence dating. *Quaternary International* available online (in press), http://dx.doi.org/10.1016/j.quaint.2013.09.011

Вишняцкий, Л. Б. 1996 *Палеолит Средней Азии и Казахстана*. Санкт-Петербург, Европейской дом.

Vishnyatsky, L. B. 1999 The Paleolithic of Central Asia. *Journal of World Prehistory* 13(1): 69-122.

『考古資料に基づく旧人・新人の学習行動の実証的研究』4
－「交替劇」A01班2013年度研究報告 －

発　行　日◎2014年3月31日発行
編集・発行◎西秋良宏（「交替劇」A01班研究代表者）
〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1
東京大学総合研究博物館　TEL.03-5841-2491
印刷・製本◎秋田活版印刷（株）
〒011-0901 秋田市寺内字三千刈110-1　TEL.018-888-3500